

4校目のF中学校時代に、ある生徒を担当したことがあった。バスケットボール部で活躍し、成績は常に一桁だった。生徒指導上問題を起こす雰囲気は十分にあるのだが、実際はそうでもなかった。3年生になり、十分に福島高校に入れる学力をもっていたが、高校を出たら働くので、進学校には行かないと言うのである。そのとき私は「この人は、結局大学に進むことになる」と思っていたのだが、「そうであれば、I期選抜で入ったほうがいい」ということになった。当然の如くすんなり合格した。

彼が成人式を迎えた日に、今では懐かしいホテル辰巳屋で、F中学校の祝う会が開かれ、招待されたので私も出席した。その場で彼と話したところ、今は大学に行っているとのことであった。「やっぱり」と思った。

なぜ、私は彼が大学に行くことになると思っていたのか。彼の保護者はお母さんだった。中学時代の彼は、本当は大学に行きたいのだけれども、お母さんに苦勞をかけたくないと考えていたはずである。高校に進んで勉強が専門的になればなるほど、彼はさらに学びたくなくなるはずだと思っていた。それぐらい学力的に優秀な生徒だった。

もう事の経緯は忘れてしまったが、彼に「今度のテストでトップになってみろ」と言ったことがあった。すると、彼はちゃんと1番になってしまうのである。彼が、当たり前のように福島高校から大学に行ったほうがよかったかどうかはわからない。でも、私は大学に進んでくれてよかったと思ったのである。

私がイタリア、ローマ日本人学校に行くことが決まり、人事異動が新聞に載った数日後に、大学生になったある教え子から手紙が届いた。2校目のH中学校時代のその教え子は、1年生のときに1年間国語を教えた生徒だった。担任ではなく部活動も吹奏楽部だった。接点は国語の授業だけとなる。私がイタリアに旅立ち二度と日本には戻ってこないと思ったのであろうか。人伝いに私の住所を探り当て丁寧な文面の手紙を送ってくれたのである。

手紙には、1年生のときの国語の授業のことが書かれてあった。「ディベート」の授業が忘れられないこと、私が彼女の国語のノートに朱書きで書いた内容のことが綴られていた。ディベートの授業は、彼女にとって新鮮かつ魅力的なものだったのであろう。彼女は優秀で国語の学力は高いのだが、自分から進んで発言するタイプの生徒ではなかった。

ところが、ディベートでは、生き生きと表情豊かに熱弁を振るっていたことを覚えている。それこそ熱く語ってしまう彼女の姿が思い出される。そういった生徒は、彼女だけではなかったところがディベートのすごいところである。あの頃、国語の授業を何とかしたいと渴望していた私が出会った突破口がディベートだったのである。ディベートには、いつの間にか、生徒たちを熱く語らせる力があつた。

彼女の国語のノートは、すばらしいものだった。あるとき、文学教材の読み取りだったと思うが、彼女のノートには、すばらしい内容が書かれてあつた。私は、朱書きで「あなたの読解力は、学年で一番です」のようなことを書いた。それを彼女が覚えていてくれたのである。実際、彼女の読解力はすばらしく、それが文章に表れていたのである。

彼女からいただいた手紙は私の宝物である。彼女の手紙を読んだ私は、意気揚々とはいかなかったが、ちょっと背中を押された感じで日本を旅立つことができたわけである。ローマでの3年が過ぎ、4校目のF中学校に勤務するようになり、5月だったと思うが、職場の夜の会があつた。会場に行くと、なんと彼女がいるではないか。彼女はそこでアルバイトをしていた。とても単なる偶然とは思えなかった。お陰で私はあの手紙のお礼を直接彼女に伝えることができたのである。これもすばらしい出会いであり、縁である。

教員である皆さんにも忘れられない教え子たち、教師である自分を成長させてくれた教え子たちがいることであろう。我々は、今もっている、今できるベストで子どもたちと接するしかないと思う。若い頃の自分の未熟さにつきあってくれたかけがえのない多くの教え子たちに感謝しながら。